

日々新たなり

「真光寺川を清流にする会」
世話人 山口 拓郎

清掃の季節

今年は春の訪れが早い。3月、水が温むのを待ちかねて清掃作業に取りかかる。例会は毎月第2日曜日と定着してきた。3月、4月、5月と回を重ねる毎にきれいになってきた。

例月30名前後の参加がある。鶴三小の横山先生、鶴四小の平野先生もみえる。3少年は中学校に進み新たに「里親の会」を立ち上げるのだと頼もしい。毎回、新会員の加入があるのも心強い。

ごみの量は一向に減らない。毎回30袋余りの収穫(?)がある。それに自転車の投棄が絶えないのはどういう訳だろうか。中には未だ使用に充分耐えるものもある。駐在所を通じて持ち主に連絡するが「捨てて下さい」と冷たい返事が返ってくる。昔「自転車泥棒」という映画を見た記憶がある。自転車は貴重品だった。使い捨て文化になじんで久しい。心の荒廃は益々深い。

「里親の会」この一年

能ヶ谷いこい会館の庭に6番目の「めだか基金ポスト」が設置された。地域の方々の好意によるものだ。

5箇所に「ポスト」を設置し「里親の会」がスタートしたのは昨年4月「みどりの日」だった。ほぼ1年が経過した。

予想以上の反響だった。我が真光寺川が多くの人々に愛され親しまれていることを知りうれしくなった。「ポスト」はその思いを正確に伝えてくれる。そしてコミュニケーションの役割を果たしてくれる。

高橋さんの献身的な奉仕活動に支えられている。

10日毎の開錠・回収

毎月「里親通信」の発行、配布

基金の管理

時には心ない輩に破損されることもあり神経を使うことも多い。

寄せられた基金も多額になった。透明性、厳正を期したいという高橋さんの

意志で3月度で収支を締め2名の方に監査をお願いした。(3月末現在)

収 入

現金 182,658円

切手 73,950

計 256,608

支 出 146,510

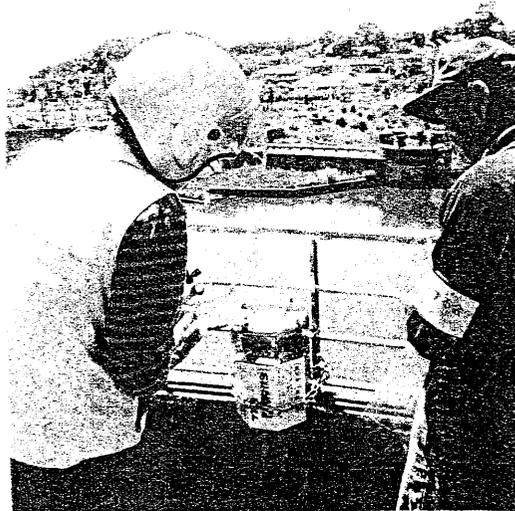
残 高 110,098

支出は「里親通信」の発行、発送費と「めだか池」の作成経費等である。

月々「里親通信」140通の郵送費は馬鹿にならない。3月からその8割を地域別に分担を決め戸別に配布することになった。

会員も「真光寺川を清流にする会」43名「里親の会」78名、計121名となった。月々新規会員を迎えている。

周辺の小・中学校ともつながりができてきた。鶴二小、鶴三小、鶴四小、和光鶴小、忠生七小、真光寺中等である。



(小川 洗氏 撮影)

また地元の理解が支えである。4月初旬には鶴川一丁目老人クラブでお話をする機会を頂いた。

「ポスト」は人の輪を広げる魔法の箱である。

「真光寺里親歌会」の発足

会員も120名の大所帯になつてきた。何より活力に満ちている。毎月、清掃作業後の反省会では様々な課題・活動計画が提起される。これらを整理し具体化していくために「世話人会」を設けることになった。場所は真光寺町の「夢庵」

毎月第2火曜日18:30からとした。記憶し易いように「三火会」それをもじって「賛歌会」と名付けた。

目下、世話人は7名である。しかし開かれた会として「会員ならばどなたでもどうぞ」ということになっている。

「夢庵」はビールと冷や奴がうまい。そのうちそれに釣られて集まる面々がふえるのではないかと今から楽しみだ。

「真光寺祭り」に向けて

子供達と「祭り」がしたい、そんな夢みだいな話をしていて。何度も繰り返しているうちに次第に現実味を帯びてくるから不思議なものだ。

時期は夏休み中、行事内容はいつそ広く募ってみては・・・。笠井さんが早速アイデア募集のチラシを作って下さる。

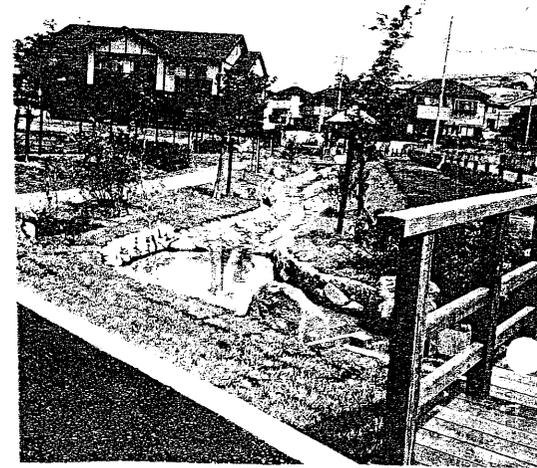
「地元と共に、子供達に楽しく」それが合い言葉である。

4月の例会後の反省会にはかり会員そしてゆかりのある小・中学校あて送付した。何かいい反応があつてほしい、いいアイデアがよせられないか、そんな期待に首を長くして待っているところである。

姿貌する上流域

待望のといつていいであろうか、「広袴公園」と「せせらぎの小径」が完成間近である。

「広袴公園」は我々が調整池と呼んでいたところだ、有刺鉄線に囲まれて荒涼とした風景だった。だが時には番の雉が遊ぶ姿が見うけられることもあった。



いま親水公園に生まれ変わろうとしている。池の中央に展望デッキ生まれ周囲に遊歩道が巡らされた。多目的広場ができ、周辺には桜や楠の植樹もされた。親水公園として四季折々多くの人々にやすらぎを与えるであろう。

「せせらぎの小径」は開発された住宅に沿って450mの遊歩道となる。流れは細いがところどころ澁みができている。ひよっとするとメダカやドジョウの格好の棲息場所になるかもしれない。

時折、自然とはなんだろうと考えることがある。真光寺川のここ数年の変貌は激しい。谷戸の景観は殆ど喪失してしまった。神明のあたりに僅かに里田が残っているに過ぎない。それとても住宅地に開発されるのは時間の問題であろう。鶴三小の荒井校長はかねがね子供達に稲作体験をさせてやりたいという希望を持っておられる。先日も会員の山本さんの案内で数軒の農家を訪問された。「もうとても田圃は続けられません」という返事だったという。

時の流れであろう。自然は人間と折合いをつけながら自在に変化していく。

「広袴公園」も「せせらぎの小径」も新しい自然の形と思えば納得がいく。「どのようにも適応してみせますよ」真光寺川のそんな弦音が聞こえるような気がする。